

F-5

東京都大田区臨海部における海辺の景観まちづくり学習のあり方に関する研究
 —(その1)小学校における総合学習での取り組みの実態について—
 A Study on the Landscape Design Learning in Ota-ku, Tokyo Waterfront
 — (Part 1) Grasp of the Contents of Integrated Study in Elementary School—

○首代佑太¹, 横内憲久², 岡田智秀³, 関奈穂⁴

* Yuta Shudai¹, Norihisa Yokouchi², Tomohide Okada³ and Naho Seki⁴

Abstract: The purpose of this paper is to grasp the actual condition of the measure which utilized the marine culture and history in integrated study in an elementary school. The contents of a measure in the elementary school which exists in the Ota-ku Waterfront were analyzed. The following thing was clarified in this research. "The practical use policy of the sea in a learning program cannot be found out" "The height of the needs of city planning study"

1. 背景及び目的—2006(平成18)年に国土交通省・農林水産省の両省から発表された「海岸景観形成ガイドライン」において、海辺の景観形成にあたっては、地域個性を尊重するのはもちろんのこと、地域住民・行政・専門家といった様々な立場から海辺との付き合い方を議論し、活動することより、海辺を共有空間として守り育てていくことの重要性が述べられている^[1]。

一方、景観法が全面施行されて6年が経過した現在、景観まちづくりに対する関心は高まるばかりである。その表れのひとつとして、景観まちづくりの意義を今後のまちづくりの担い手となりうる子供たちへ伝えていくその重要性から、小中学生を対象とした景観まちづくり学習が注目されている^[2]。この点につき、上述した海辺の文化・歴史を景観まちづくり学習で学ぶ大切さは理解できるところであるが、その具体的なプログラムは構築されていないのが現状である。

そこで本研究では、海辺の文化・歴史を学ぶ景観まちづくり学習のプログラム構築をねらいとし、本稿では、小学校の地域学習が含まれる「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を通じて、小学校における地域学習の取り組みの実態について捉えることを目的とする。

2. 研究方法—筆者らの先行研究^[3]において、東京都大田区臨海部(以下、大田区臨海部)では東京初の海水浴場が開かれるなど、まちが海によって発展してきた文化・歴史を捉えた。この海の文化・歴史を地域学習の要素として取り扱うことは意義が高いものとする。このことから本研究では、大田区臨海部の小学校を対象とする。対象小学校は大田区の海岸線から、その周辺で最も幅員の広い国道15号に挟まれた中に存在する全14校とする^{*1}(Figure 1)。この14校に対し、総合学習の取り組み内容と大田区の海浜の利用に関するヒア

リング調査を実施する。

3. 結果及び考察—全14校のうちヒアリング調査に応じてもらった9校の回答内容をTable 1に示す。以降ではこの中から特徴的な内容について述べる。

(1)総合学習での取り組み内容—総合学習での取り組み内容についてみると、「まち学習」の取り組みが9校中7校みられ、小学校におけるまちづくり学習のニーズの高さがうかがえる。その内容としては、海苔付け体験などの「海苔学習」の取り組みが7校中5校でみられた。これは大田区臨海部において、海苔産業は重要な生業として行われてきたことから、海苔のまちとして栄えた歴史を児童に理解させようとする取り組みである。



Figure 1. Ota-ku, Tokyo Waterfront district map (This is original figure my authors)

1 : 日大理工・院・不動産 2 : 日大理工・教員・建築 3 : 日大理工・教員・交通 4 : 日大理工・学部・海建

Table 1. The contents of integrated study and use situation of the beach(This is original table mv authors)

番号	事例名 (区立)	総合学習		
		取り組み内容	活動場所	目的やねらい
1	大森第五小学校	・まち学習 ・海苔学習 ・環境学習 ・米の調べ学習	・校内 ・美原通り ・ふるさとの浜辺公園	・自分のまちの様子や、人とのつながりを知る ・自分のまち良さを知り地域に愛着を持たせる ・自分の生活見つめなおす ・環境と食文化とのつながり
2	大森東小学校	・まち学習 ・海苔学習 ・防潮堤を調べる防災教育	・校内 ・学校周辺地域 ・ふるさとの浜辺公園 ・海苔資料館	・「のりのまち」であったことを児童に知ってもらう ・防災教育
3	中富小学校	・まち学習 ・海苔学習 ・環境学習 ・情報を読み解く調べ学習 ・移動教室についての調べ学習	・校内 ・鎌倉(移動教室)	・海苔の歴史を知り、海苔付け体験学習をする ・社会科で学習した「上下水道やごみ処理」について、自分で課題を設定して調べ学習 ・新聞の記事をもとに、書かれている言葉や内容を調べ、自分の考えをまとめる ・大森東とのつながりの深い鎌倉について課題を設定して調べ、グループで校外活動の計画を立てる
4	北糀谷小学校	・まち学習 ・海苔学習 ・浜辺での砂遊び ・環境学習 ・パソコンの使い方 ・伝統文化を学ぶ ・高齢者との交流 ・命について考える	・校内 ・ふるさとの浜辺公園 ・海苔資料館 ・多摩川	・地域の伝統産業である「海苔づくり」を体験し、地域の歴史と人々の苦労や工夫を知る ・自分たちの生活は地域の人々や場所と関わりを持っていることを知る
5	羽田小学校	・まち学習 ・安全マップ作製の防災教育 ・アサガオ観察 ・校内や近所での季節探し ・畑の観察 ・パソコンの使い方 ・羽田空港について調べる ・高齢者と交流	・校内 ・萩中公園 ・大井ふ頭中央浜辺公園 ・学校の畑 ・地元商店街 ・学校周辺地域 ・羽田空港	・自分たちの住んでいるまちを知り、情報を発信していく ・歴史上での出来事を身近に感じ、地域に対する理解、親しみを深める ・アサガオの成長や変化について気づき、植物への親しみを深め、愛着を持ってもらう ・ローマ字に興味を持つ ・自分のまちにある日本の代表的な施設について理解を深め、自分たちのまちのかかわりを知る ・セーフティ教室や、避難訓練で学んだことをふりかえりながら、安全マップをつくる ・日本と外国とのつながりを羽田空港の持つ役割を理解する
6	萩中小学校	・まち学習 ・海苔学習 ・安全マップ作製の防災教育 ・米の調べ学習 ・移動教室についての調べ学習 ・高齢者と交流	・校内 ・学校周辺地域	回答なし
7	都南小学校	・干潟観察 ・公園探検 ・大豆学習	・校内 ・干潟 ・大師橋付近	・公園の遊具を使って友達と遊ぶため ・体験活動と調べ学習を通して食べ物の大切さをする ・干潟について学ぶ
8	中萩中小学校	・多摩川の環境学習 ・身近な自然	・多摩川	・身近な自然についての調べ学習 ・多摩川の生態について知る
9	南六郷小学校	・まち学習 ・パソコンの使い方 ・英語 ・ごみ工場の見学 ・移動教室についての調べ学習 ・米の調べ学習 ・中学校について	・校内 ・学校周辺地域 ・伊豆高原(移動教室)	回答なし

番号	事例名 (区立)	海浜の利用		
		利用の有無	評価点	課題点・海浜を利用しない理由
1	大森第五小学校	○	・全校生徒でいける広さと近さがある	・大森の海に愛着を感じてもらえていない ・夏しか集えない
2	大森東小学校	○	・小学校の近くにある ・地域の魅力資源として授業に活用できる	なし
3	中富小学校	○	・地域に愛着を持つようになった ・異学年交流を図ることが出来る ・地域の運河を清掃し、地域を大事にする気持ちを育てることができる	回答なし
4	北糀谷小学校	×	回答なし	・海に親しむ為には「泳げる」が大切だと思う ・海までの距離が遠い
5	羽田小学校	×	回答なし	・海浜を利用する理由が特別ない
6	萩中小学校	×	回答なし	回答なし
7	都南小学校	×	回答なし	・ほかの取り組みに時間をかけるようになった ・遠い
8	中萩中小学校	×	・子どもが自然に関心を深めた(多摩川)	・安全面での配慮が必要 ・海や川が身近にあっても有効活用できる手段がない
9	南六郷小学校	×	回答なし	・遠い

[凡例] ○:無回答 ○:利用している ×:利用していない

また、学校近くの防潮堤を調べるといった「防災教育」を行う事例が3校でみられた。この取り組みは津波などの臨海部特有の災害を考え、児童の意識を海へ向けさせることを期待するプログラムといえよう。

(2) 海浜の利用—近隣の海浜の利用についてみると、実際に利用していたのは、9校中3校であった。海浜の利用による評価点は「地域の魅力資源として授業に活用できる」「地域に愛着を持つようになった」などの意見が挙げられ、海浜を地域資源として捉えている事例があることを把握した。しかしながら、海浜を利用しない理由や海浜の問題点に着目すると、「海浜を利用する

理由が特別ない」「海や川が身近にあっても有効活用できる手段がない」といったものが挙げられた。これは、大田区の海には様々な文化・歴史が蓄積されているにも関わらず、学習プログラムでの海の活用法を見出せていないためであると考えられる。そこで今後は、海辺での景観まちづくり学習における海の活用方策を見出し、学習プログラムに反映させることが求められよう。

4. 補注・参考文献

- ※1 幅員の大きい道路を選んだ理由として、これまでの先行研究[4]において幅員の大きい幹線道路より内陸部では海浜の利用が見られなくなったことから国道15号線を基準とした
- [1] 「海岸景観形成ガイドライン」国土交通省・農林水産省, 2006
- [2] 国土交通省:「学校における景観まちづくり学習の手引き」, 国土交通省, 2008
- [3] 福田朗大:「海の文化性を活用した大田区臨海部のまちづくりに関する研究」, 日本大学大学院理工学研究科不動産科学専攻修士論文, 2011
- [4] 鈴木真平:「地域住民の日常利用を促す都市部の人工海浜整備に関する研究」, 日本大学理工学部海洋建築工学科卒業論文, 2009